

令和 2 年度 第 2 回分野別会議 主な意見について

介護保険に関する会議（10月20日、本庁大集会室）

＜介護サービス・介護人材に関すること＞

- ・地域包括や施設などを含めて、ケアマネジャーがケアプランの定期的な見直しや適正化を行っていく必要がある。
- ・訪問介護のヘルパーの不足は、在宅生活を支えていく上で重大な問題。人材確保は非常に重要。
- ・今後は、外国人介護人材や、先端技術・ロボットの活用が必要。本市には先進的介護「北九州モデル」がある。介護人材の確保との関連が深い。
- ・外国人介護人材については、様々な受入れ方法があり、経験によって業務の幅が広がってくる。
- ・入院するより、特別養護老人ホームやグループホームに入所して、人らしく生活したいという願いがある。必要なところに人材を確保し、これらの施設の整備は最低限していただきたい。

＜介護予防・健康づくり＞

- ・介護認定された後の変化を見せることができれば、要介護状態になれば自分に影響があると認識でき、何となく介護予防や健康づくりをやるよりも、モチベーションの向上に繋がるのではないか。
- ・サロンに通っている人は、医療費の上昇率が低く、要介護度の悪化率も低いという他自治体のデータがある。また、男女別では男性の状態が悪く、地域で居場所をどのように作っていくのかがポイント。
- ・要介護状態が悪化する原因は、ほとんどがメディカルなイベント（例えば骨折、肺炎、尿路感染症など）ケアマネジメントの中で、メディカルなイベントの予防が一番重要であり、メディカルなリスクのことを共有する仕組みをどのように作っていくかが大事。
- ・在宅訪問診療を受けている人のうち、訪問看護や歯科の診療をきちんと受けている人は、ほとんど入院・入所していないというデータがある。介護と医療の定着が重要。

＜その他いきいき長寿プラン全体に関すること＞

- ・認知症の人が発信できる場の構築について、例えば認知症カフェなどがあると思う。非常に大事なことであり、是非具体的な形にしていただきたい。
- ・虐待防止の充実について、地域包括支援センターが中心となって相談窓口の設置や充実等の強化をしていただきたい。虐待の問題は後を絶たず、非常に厳しい家庭の中の介護状況というのが伺える。
- ・（本計画は）どうやって健康な高齢者を増やし、高齢者の健康を増進し、北九州市の財政の中で、適正に介護保険制度をコントロールしていくかが大事ではないかと思う。
- ・今後は、（在宅介護の効率を考えると）「住まい方」や住宅施策と組み合わせて考える必要がある。

地域包括支援に関する会議（10月27日、本庁大集会室）

<地域での活動の支援>

- ・高齢者の方々は自主的に何かをする、動くという意欲が弱いようだという話を聞く。リーダーを育成するのはとても大事なことだと思う。
- ・地域のことを一番よくわかっているのは、地域の方である。だから、（地域で）きちんとしたネットワークを作り、もっと活用したら（リーダーの育成も）できるのではないか。それも一つのやりがいにもなる。
- ・高齢者も元気な方で何かしら役に立ちたいという気持ちがあるので、そういう方を巻き込んで、支援されるとか支援するとかではなく、お互いがイコールのということで、やっていかなければならないと思う。
- ・地域で、（介護支援ボランティアによって）高齢者のボランティアの方が、参画していただいているようだ。地域づくりであったり、共生と共助っていうところにつながり、地域にとってはとてもいい勉強になる。
- ・介護支援ボランティアを市から委託して行っているが、やはり、自分がやったことが目に見えるというところで意欲が高い。今後も皆さんの意欲につながるようなものをしていきたい。
- ・地域のサロンでは、参加するだけではなく、参加者も支援者になり得るような、受ける側だけではなくて、一緒に活動する側にも回っていただけるような働きかけをやっていきたい。

<相談・支援体制>

- ・地域包括支援センターの役割拡充とセンターがやっていることのアピール（周知）の両輪が必要。また、相談しやすい仕組みづくりとともに、アウトリーチ（訪問）も必要。
- ・今後は、相談まで行きつかない方々をどのようにくみとっていくのかシステムづくりの検討が必要。
- ・複合的な課題を抱えた家庭の対応について、地域社会で支えるには、医療・司法・弁護士等の協力も必要。

<高齢者の権利擁護>

- ・認知症の診断をされ不安がある方々にとっては、当事者の言葉というのはとても影響力があると思う。北九州市でも参加する場が増えている。ぜひ発信できる場というのは確保していただきたい。
- ・発信する人の選出には、それまでの表現を知る人たちの支えが必要であり、周囲が意義を承認しているかなど慎重さが求められる。
- ・成年後見制度のPRを強化すべき。高齢者だけでなく、若い人たちにもアピールしたほうがよい。
- ・介護疲れや認知症への理解不足など虐待の背景を踏まえ、養護者を含む家族全体を支援するためには、既存の団体を有機的につなぐシステムづくりが必要。

<その他>

- ・地域ケア会議について、例えば、ハイブリッドでやっていけないか。集まれる人は集まれるけど、リモート（ズーム）でもやるというような形で開催できないか検討してはどうか。
- ・デジタル技術の推進により、他人とのコミュニケーションが失われていく恐れも否定できない。どのようなビジョンを描いているのか説明が必要だと考える。
- ・コロナ禍において、単身高齢者の機能低下について、実態を把握する必要があるのではないか。

認知症支援・介護予防・活躍推進に関する会議（11月2日、アシスト講堂）

<生きがい・社会参加の推進>

- ・シルバー人材センターでは、60歳以上の方の短時間就労を支援しており、地域での多世代交流や伝統文化の継承などの社会活動の意味合いもある。会員対象のパソコンやスマホ教室も行う予定。
- ・夢追塾では、初めての高齢者でも、指導・説明があれば何回かしているうちに、スマホやZOOMを楽しめるようになった。きっかけづくりが重要。高齢者の意欲増進にもデジタル環境が大事。
- ・高齢者のデジタル技術を向上させるためには、指導できる人の養成が必要。民生委員など、高齢者宅を訪問する人がスマホの技術を習得して、話すきっかけとして広がる可能性もあるのでは。
- ・デジタル技術の習得は、住民主体の通いの場（生涯学習活動、学校等の社会資源等）を活用できないか。
- ・ボランティアの方々はコロナを恐れる気持ちもあるが、対面でやりたいという思いが動機づけになっている。ボランティアのあり方・やり方に注視して、意欲の低下を防ぐことが必要。
- ・計画の中に、多世代コラボなど的高齢者の活躍の場を具体的に提示していただけたらありがたい。

<健康づくり・介護予防>

- ・健康づくり推進員は、市民センターを活動の拠点としている。強化ポイントである「支える人（担い手）が活躍できる環境づくり」を進めるには、市民センター館長にも健康づくり推進員活動の理解が必要。
- ・塩分チェックシートは塩分摂取量が分かるので動機づけによい。栄養士会としても力を入れたい。
- ・（健康づくりスマートフォンアプリ）「GO!GO!あるくっちゃkitaQ」がとても良いと思うので、運動教室と組み合わせるとこのアプリにあったプログラムを市民に提供するとよいのでは。
- ・マスク社会ではあるが、会話は口腔機能向上にも大事。地域支援コーディネーターにも運動・口腔・栄養の重要性の発信に協力していただきたい。
- ・総合事業のイメージ図のように活動性を上げて元気になるには、各種事業の後のサポートが重要。

<認知症対策>

- ・認知症家族へのアンケートで、身近なところに自分の話を聞いてくれる人がいることで、介護を続けられたという結果があった。認知症カフェはニーズもあるので、頑張って再開させたい。
- ・学生や子供を対象にした認知症サポーター育成も計画しているとのこと、「キッズサポーター」と分かりやすく設定してはどうか。
- ・認知症サポーター養成講座の受講後に、地域のために活動したいと思う人がステップアップして、活動できる仕組みができないか。
- ・本人発信の場は若年性認知症の方を想定しているだろうが、本人の家族が働いている場合が多いので、集まりの場に本人と一緒にしてくれるサービスや地域の協力が必要である。
- ・認知症サポーター養成講座には、認知症の早期発見に繋がることや接し方を多く取り入れてほしい。養成講座は市民センターで開催する講座や家庭教育学級にも取り入れてもらおうとよい。

<その他>

- ・「北九州市SDGs未来都市計画との関係に、17のゴールのうちどの項目に該当するかを明記してはどうか。
- ・新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑みながら、感染予防対策を徹底した「正しい集い方」の継続が必要。